

法隆寺伝来「蜀江錦」〈赤地獅子鳳凰円文錦〉
及び〈赤地小格子連珠花文錦〉の制作年代の再検討

廣谷 妃夏（東京国立博物館）

法隆寺伝来の「蜀江錦」は、法隆寺献納宝物として現在主に東京国立博物館が所蔵し、各地の美術館、個人が断片として所蔵する。〈赤地亀甲繫花葉文錦〉〈赤地獅子鳳凰円文錦〉〈赤地小格子連珠花文錦〉の三種が知られ、赤地の平組織経錦という共通点をもって「蜀江錦」と総称される。本発表は、このうち現在の制作年代観の基準となっている〈赤地獅子鳳凰円文錦〉〈赤地小格子連珠花文錦〉の両種の錦を採り上げる。結論として、従来、7世紀後半とされてきた制作年代を、6世紀後半から7世紀初頭に遡りうる可能性を提示する。

本発表は、東京藝術大学大学美術館所蔵《蜀江錦幡残欠》、《蜀江錦》及び東京国立博物館所蔵《蜀江錦綾幡残欠》、《蜀江錦幡残欠》、《蜀江錦帯》、《双鳳獅子唐草連珠円文錦》の各作例の実見調査に基づく。主な方法として、現在の新疆ウイグル自治区タリム盆地遺跡群及び青海省都蘭県吐蕃墓から出土した染織品資料の文様・織技術との比較検討、及び当時の四川地域における錦の生産背景の検討を行い、東部ユーラシアの染織史における法隆寺「蜀江錦」の年代について再考する。

両錦は従来概ね7世紀後半の制作と考えられている。これは太田英蔵氏 [1953] の論考をはじめ諸先行研究において、両錦とほぼ同文様の出土資料であるアスターナ古墓群出土の《赤地連珠双鳳獣文錦》と、トクク石窟出土の《赤地小格子連珠華文錦面覆》双方に、「667年」の年代が結び付けられてきたことによる。これに対し発表者は、先行研究における出土情報の混同及び文様変遷の解釈の問題について指摘し、アスターナ古墓群の出土状況を精査した上で近年の考古学的報告も含め再検討を行った。以上の作例を踏まえ、両錦について日本伝世錦とユーラシア大陸出土錦を合わせて類型分類を行い、文様要素と織組織の面から考察した。結果として各文様要素は6世紀半ばから7世紀前半の特徴を有していることを確認した。タリム盆地出土の染織品資料と伴出年代資料から類推できる織技術の変遷からみれば、7世紀前半には中国で「平組織経錦」から「綾組織経錦」へ、7世紀後半には「綾組織緯錦」への転換が起こっており、法隆寺の日本伝世錦においても同様の変遷が指摘できる。実見調査において文様表現・糸密度・文丈の点で両錦はそれぞれ少なくとも5類型に分けうることを確認した。さらに、出土錦と比較して文様解釈や織耳の特徴に差異があることも事実であり、よって両錦の各断片の生産地の判別にかかる問題は依然として残る。しかし典型的な平組織経錦である法隆寺「蜀江錦」の制作年代を7世紀後半のままとするのは難しく、文様表現においても、大陸出土錦と日本伝世錦を一例に並べるならばユーラシア大陸出土錦により近い要素を有す。以上より、法隆寺「蜀江錦」〈赤地獅子鳳凰円文錦〉〈赤地小格子連珠花文錦〉の制作年代について、6世紀後半から7世紀初頭という可能性を提示する。